ISSN 0387-3269

平成二十四年三月十五日発行

俳文学会

連歌俳諧研究

第百二十二号

目次

「象潟や雨に西施がねぶの花」における西施像 …… 黄　佳慧（一）

伊勢俳壇と山口羅人門
—津市石水博物館蔵川喜田家資料を軸にして— …… 早川由美（一三）

蕪村「花ちりて」句文を読む
—『花鳥篇』をめぐって— …… 玉城　司（二五）

『新五子稿』について
—蕪村「おもかげも」句を中心に— …… 福田安典（三九）

発見と報告

加藤暁台の書簡と連句評点について …… 寺島　徹（五一）

俳文学会第六十三回全国大会

第六十三回全国大会の記 …… 谷地快一（六四）

俳文学会第六十三回全国大会シンポジウム
—俳句記念館の明日を考える— …… （六九）

研究発表要旨 …… （九五）

平成二十二年度連歌俳諧関係論文目録 …… （一〇三）

平成二十二年度連歌俳諧研究資料目録 …… （一一九）

新刊紹介 …… （一二七）

学会彙報 …… （一三〇）

『連歌俳諧研究』投稿規程 …… （一三五）

「象潟や雨に西施がねぶの花」における西施像

黄　佳　慧

序

『おくのほそ道』「象潟」章段において、芭蕉が蘇軾の「西湖」詩を巧みに取り込んでいることは、従来の研究ですでに指摘されているところである。しかし、これまでの注釈を概観してみると、近世期の古注と近現代の注釈との間には異なる点も多く、特に「象潟や雨に西施がねぶの花」[1]という発句の解釈には、両者の間に大きな乖離が生じている事に気づく。

近世期の多数の古注書は「ねぶの花」を眠る花として捉えている。例えば、一筆坊鷗沙の『芭蕉翁句解　過去種』や、衛足杜哉の『芭蕉翁発句集蒙引』、六平斎亦夢の『俳諧一串抄』などにおいて多く見出せる。[2]そのような古注書の中で、「西施がねぶの花」によって表出された眠い西施像を、眠海棠に譬えられた楊貴妃と関連付ける解釈があった。例えば、鳩の屋嘯秋の『句解和談奥の細道』、あるいは止隅の『奥のほそ道解』において見られる。[3]それに対し、近現代になると、その「眠る」という解釈が変化し消失してくるのである。

このような解釈の変遷に対して、本稿においては、近世期の古注を再検討することによって、芭蕉の描こうとした西施像、すなわち、芭蕉がこの発句を詠む際に、想像した西施の姿を明らかにしたいと思う。

一、先行研究における西施と「ねぶの花」

「象潟」章段について、近世期の『おくのほそ道』注釈（以下、「古注」と略記）を調べてみると、発句「象潟や雨に西施がねぶの花」の「ねぶ」に「眠る」の意が掛けられている、という見解がしばしば見られる。[4]一方で、西施の典拠として、古注の指摘する『史記』[5]や『荘子』[6]、さらに蘇軾の「西湖詩」[7]には、西施の眠る姿に関する記述あるいは表現は見出せない。

しかし、眠る西施という解釈に全く根拠がないわけではないと思われる。古注の中には、合歓の花を眠海棠に喩えられる楊貴妃に関連付けて解したものがある。たとえば、次の①の正月

堂『師走嚢』（明和元年か二〈一七六四か五〉年刊）[8]である。

①象潟の花に合歓の花を詠ぜる句也。西施を入たるは彼玄宗の楊貴妃を眠海棠いまだ眠覚ずといへるを取て、雨に花の濡たるは、西施が眠りし如く也とぞ。

右の通り、正月堂は唐の皇帝・玄宗が楊貴妃を眠海棠と譬えたという『旧唐書』の話を、芭蕉の発句に取り入れて解釈している。すなわち、正月堂はその「眠海棠」の話によって、芭蕉の発句における眠る西施の様相を照応して捉えているのである。

また、次の②の曙紫庵杉雨は『芭蕉翁発句評林』（宝暦八〈一七五八〉年刊）[9]において、芭蕉が松島を笑う楊貴妃に譬えたように、象潟を眠る西施に見立てた、という見解を述べている。本文は次の通りである。

②松島は笑ふが如く象潟は眠るが如しと、扶桑第一の好風にして、造化の天工狩野も筆を捨てたるべし。ア美人の笑める如しとイ雨を帯たる梨花によそへて、合歓の花を西施になぞらへたり。海棠の雨にねぶるを新しく、やはり合歓の木にとり直されたる、名人のうへなればなり。象潟の風景をよく云ひかなへたる妙意なり。

右記の傍線部イ「雨を帯たる梨花」とは、周知の通り、白居易が楊貴妃を詠んだ「長恨歌」の「梨花一枝春帯雨[10]」を踏まえている表現である。そのため、傍線部ア「美人の笑める如し」における美人は楊貴妃のことであると推定できる。以上、①②の古注を参照すれば分かるように、楊貴妃に関連させてこの「象潟や」発句を解釈するものがあったのである。そして、このような解釈は明治以降になってもしばしば踏襲されている。

一方で、古注における西施と合歓の花とを関連付ける解釈の中には、違う立場もある。それは楊貴妃を介在させず、芭蕉が直接に「西施」と「ねぶの花」とを取り合わせたとする解釈もあり、近現代においても、そのような解釈と同様のものがある。例えば次の通りである。

③象潟の旅中で、ねむの花が咲いてゐて雨も降ってゐた、ねむの花より眠るといふ事を連想して其花を美人に擬し、雨中のねむの花は恰も西施が眠つてゐる如くぢやといふのを雨に西施が眠る其のねむの花といつたのである。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』大學館、一九〇四年）

④無黄曰、意は此象潟の雨の景は恰も西施が眠つて居る姿に似て居るといふのを、時候の取合せで合歓の花と座五を置いたので、要するに象潟の勝景を称へたものである。（森無黄を含めた角田竹冷外十余氏合作『芭蕉句集講義』博文館、一九一五年）

右のように、眠る西施に対して特に典拠を踏まえずに、率直に読み取るという解釈がなされているものが、明治以降になっても確認できる。

また、樋口功氏は『評選芭蕉句集』（成象堂、一九二六年）において、「合歓はネムで、西施の眠とかけて、西施の顰の趣を匂はせたのかとも思はれる」といい、西施の眠ると顰めるとい

う両方の趣意によって、この発句を解釈している。その後、麻生磯次氏は『奥の細道講読』（明治書院、一九六一年）で、「芭蕉は敵地に送られて憂いに沈む西施を思い出したのである」と、主に『史記』の記載における、敵地に送られた憂愁の西施によって解説をしている。「象潟」の章段は、確かに「松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。」という一文があり、象潟の地勢は特に『荘子』に記された、病で悩む西施に譬えられ、描き出されている。そのため、『おくのほそ道』「象潟」章段と発句を照応して考えると、発句の西施像を憂愁の容貌とする麻生氏の解釈は、整合性があると言えよう。したがって、近代の注釈には、特に古注も指摘した『史記』や『荘子』の記述を参照し、合歓の花を眉を顰めて憂愁を帯びた表情の西施に擬えているものが確認できる。

その解釈を踏まえ、近年は、次のような解釈がなされるようになっている。

⑤この象潟にきて雨に煙る景色を眺めやると、それは雨に濡れるねむの花のような哀れなやさしさがあり、ちょうどあの美人の西施が物思わしげに目をつぶっているような趣が想像されることだ。（井本農一・堀信夫『松尾芭蕉集①』小学館、一九九五年）

⑥象潟は折からの雨に朦朧とうちけぶって、その中からかの美人西施が憂いに眼を伏せた悩ましげな面影がそぞろに浮んで来るような感じがされたが、西施の面影と見たのは、実は岸辺に生い茂るねぶの花の雨にそぼぬれて葉を閉ざした姿であった。（尾形仂『おくのほそ道評釈』角川書店、二〇〇一年）

右記の⑤の解説を参照すると、哀れで憂鬱気な表情で、瞑目しながら思いをめぐらせている西施によって、象潟の景色を描写していると説明している。また、⑥の評釈を見ると、より悩ましそうな西施の容貌を、この発句に付け加えたように読み取れる。すなわち、近年になると、「ねぶの花」を眠りの様子として捉えず、憂いで目を伏せ、哀れや憂わしげな容貌で把握するようになっていることがわかる。

以上の如く、近世・近現代の先行研究を検討してみると、この発句に対する解釈は、次のような三種類に大別できる。

A．楊貴妃を擬えた眠る西施。

B．「ねぶの花」を掛けた眠る西施。

C．憂愁で目を伏せる西施。

そして、右記以外に、たとえばA＋Bで解釈を行うか、あるいはB＋Cで説明するのかなど、注釈者によって各種の西施像の様相が生じている。また、これまで述べてきたように、Cの解釈は「象潟」章段全体と照応し、『荘子』という典拠もあるため、説得力があるものといえる。しかし、AとBの場合は楊貴妃との連想関係があるのかということや、あるいは、格別に典拠を持たず、単に眠る西施と解釈することが可能なのか、というこ

となどまだ疑問点が少なからずある。そこで、一旦注釈書から目を離し、近世初期における「ねぶの花」が眠る西施を連想した可能性を検証することとする。

二、「合歓の花」と「眠る西施」について

(一)「合歓の花」

合歓の花の初出は、『万葉集』(巻八・一四六一)「昼は咲き夜は恋ひ寝る合歓木(ねぶ)の花君のみ見めや戯奴さへに見よ」[11]に求められる。そして、『万葉集』における「合歓木」について、室町時代に成立し、元和三(一六一七)年刊の国語辞書『下学集』[12]は「合歓木(右訓「カツクワンボク」左訓「ネブノキ」)睡(ネム)ノ木或ハ作レ昏(クン)ニ」と示している。このことは、松尾靖秋氏の『おくのほそ道全講』(中道館、一九七四年)、あるいは佐々木清氏の「『おくのほそ道』における歌枕認識の方法　その2―「象潟」の章の考察を中心に―」(『連歌俳諧研究』61号、一九八一年)において、すでに指摘されている。これらの論考を参照しつつ、和歌の用例ないし辞書の説明を再調査してみると、合歓の花は早くから、眠りを掛ける表現として用いられていることがわかる。

一方、芭蕉の「象潟や」の発句を詠んだ以前に、「ねぶの花」をそのままで俳諧で用いた用例については、『古典俳文学大系』(集英社、一九七〇―一九七一年)を調査した限りでは見当たらない。しかし、本節の冒頭に取り上げた『万葉集』「合歓木(ねぶ)の花」に類似する「ねぶの木の花」として詠んだ発句ならば、『古典俳文学大系』に収録された俳書の中から、「ねぶの木の花もねぶれる夕かな」(『塵塚誹諧集』寛永十〈一六三三〉年写)が見出せる。その発句における「ねぶの木の花」とは、すなわち合歓の花のことであり、この俳諧は「その花も眠っている日暮れだったよ」と解せる。したがって、合歓の花が「眠る」という意味を有していることは、『万葉集』だけではなく、俳諧においても確認される。

合歓の花を眠りに掛ける用法について、芭蕉も実際にそのように用いたのか、なお疑問が残る。興味深いのは、許六が『風俗文選』(宝永三〈一七〇六〉年跋)[13]の「百花譜」において合歓の花を解説している、ということである。許六は元禄五(一六九二)年に蕉門に入門した時点で、すでに『おくのほそ道』を目にしたことがあった[14]。ここで、『風俗文選』で許六が捉えた合歓の花の印象を、同時代における捉え方の一例として、確認しておきたい。さて、『風俗文選』における「合歓の花」の項目は次のように示されている。

合歓(ねぶ)の花のねふげなるは。深閨の中に縫物をかゝえ。昼眠る女に似たり。過にし夜半の。いかなる事かありて。かくはねふりけむ。いとおぼつかなし。

すなわち、許六が行った解説によると、合歓の花の眠そうな様子は、自分の寝室で縫物を抱きながら、昼に居眠りをする女性の様子に似ているという。ここで「合歓の花」を「眠る女性」

に譬えるように、許六が理解していると考えられる。

このように、実際に芭蕉の「象潟や」の発句を見ていた許六が、このような解釈を行ったことは注目すべきことであろう。許六の解釈及び近世初期における合歓の花の表現を勘案すると、「西施がねぶの花」を眠る西施として見立てた可能性を、より重視すべきではなかろうか。

(二)「眠る西施」

近世初期の俳諧において、西施の眠る様子を以て、名所を表現することがあったのであろうか。芭蕉が「象潟」章段を著す時、特に蘇軾の「西湖」詩を踏まえて創作したと指摘されている。その上、芭蕉以前に、同じく蘇軾の「西湖」詩を踏まえて、紀行文に取り入れた作品といえば、西山宗因『津山紀行』「美作道日記」[15]が想起される。本文は次の通りである。

しばらくしほがゝりするほど、一曇一しきり雨ふるも又奇なり。西施を以て西湖になぞらふには引かへて、名にしおふ明石の上のおも影もうかびぬべし。

芭蕉が宗因のこの章段の影響を受けた上で、「象潟」章段を作したのであろうと、島津忠夫氏は「美作道の吟行—西山宗因『津山紀行』」[16]において指摘している。しかし、右記の通り、『津山紀行』には眠る西施という要素がない。よって、『津山紀行』は芭蕉に影響を与えた、という島津氏の指摘は首肯できるが、芭蕉の「眠る西施」について、そのほかの典拠を探るべきであろう。

この他に、特に西施を踏まえた俳諧というと、たとえば次のような例がある。[17]

- 「捨てられし西施は野辺の美人草」

（良徳編『崑山集』明暦二〈一六五六〉年刊）

- 「水糊西施が影をこぼすらん　千之」

（其角編『虚栗』天和三〈一六八三〉年刊）

- 「秋霧は西施を見たる人の情　キ角」

（路通編『俳諧勧進牒』元禄四〈一六九一〉年刊）

右例のように、『古典俳文学大系』に収録された俳書を調べた限りでは、これらの句に表された西施には、蘇軾の描出する西施の姿や、眠る容貌を以て表現した西施が見出せないのである。よって、芭蕉の描写した眠る西施は、これまでの俳諧において全く新しい姿であった可能性もある。

ところが、芭蕉は蘇軾の「西湖」詩を踏まえた上で、「象潟」章段を創作したと従来から指摘されているため、『荘子』のみならず、蘇軾の描いた西施の容貌も検討に入れる必要がある。そこで、次節は一歩進めて、蘇軾の漢詩で描写された西施像を見極めることで、芭蕉が合歓の花によって趣向を凝らした西施像を究明したい。

三、蘇軾の「西湖」詩からみる芭蕉の西施像

芭蕉は特に『聯珠詩格』巻二に記載された「西湖」詩を踏ま

えた上で象潟の章段を創作したと、従来から指摘されている。[18]

また、江戸初期における『聯珠詩格』の刊行や流布について、住吉朋彦氏は「旧刊『聯珠詩格』版本考」[19]において、次のように説明している。

室町期まで、本書の元刊本もしくは［南北朝］刊本系統による単注本の受容に止まっていた日本では、文禄慶長の役（一五九二、七）を画期として、朝鮮刊本、殊に徐居正増注本の受容が広がった。現在まで朝鮮明弘治十五年跋刊本、朝鮮甲辰字刊本の伝来が認められた他、寛永九年以前［江戸初］刊本が、両者と同じく朝鮮甲寅字刊本を定本として、徐氏校注の優良な本文を流布させた。

右記の如く、『聯珠詩格』は室町期までは、于済が編集し、蔡正孫が増編・批注した「単注本」（以下「単注」と表記）のみが流布している。しかし、文禄元（一五九二）年頃から、徐居正が施注した「増注本」（以下「増注」と表記）という朝鮮からの刊本が広まり、江戸初期には特に徐氏「増注本」が流布するようになる。すなわち、江戸初期において、『聯珠詩格』に記載された蘇軾の「西湖」詩には、全詩文が掲げられているだけではなく、「単注」・「増注」も含まれているということである。よって、「単注」・「増注」を含めた注釈が載る『聯珠詩格』によって、芭蕉の発句を検討することが適切であろう。

さて、ここで主に芭蕉が参照したと思われる、正保三（一六四六）年に刊行された『聯珠詩格』[20]を以て、考察を進めることとする。そこに載った蘇軾の「西湖」詩は注釈を含めて次の通りである。（以下、（　）における注釈は蔡正孫が施した「単注」であり、その「単注」の中に、㊀以後のものは「増注」である。）

水光瀲灩トシテ**晴**テ**偏**ニ**好**シ（①此レ是濃抹也、㊀瀲ハ力冉ノ切。灩ハ以贍ノ切。瀲灩ハ水動ク貌ナリ。「偏」ヲ本集ニ作レ「方」ト）**山色朦朧**トシテ**雨**モ**亦奇**也（②此レ是淡糚也。㊀「朦朧」ハ本集ニ作レ「空濛」。選詩ニ「空濛トシテ如シ薄霧ノ」）**若シ把テ西湖ヲ比セハ西子**ニ（以テ西子ヲ比ス西湖ニ、工巧ナリ。㊀③西子ハ即チ西施ッ。『寰宇記』ニ、「施」ハ、其ノ姓也。會稽諸暨縣ニ有ル西施ノ家。勾踐得テ諸暨縣ニ、以テ獻ス呉王ニ。東坡又云ク、「只有リ西湖ノ似タレ西子ニ」）**淡糚濃抹兩**ナカラ**相宜**カラン（㊀④虢國夫人美質ニシテ、不レ施サ糚粉ヲ。「抹」ハ、塗抹シテ也。兩ヲ本集ニ作レ「總」ト）

この詩文に注目すると、西施について言及したところは第三句「若シ把テ西湖ヲ比セハ西子ニ」のみである。芭蕉はどのようにして「西子」のことを「西施」であると理解したのであろうか。「西子」という呼称を用いた俳書について、梅盛編『俳諧類船集』（延宝五〈一六七七〉年）があるが、そこでは「西子」が「西施」であるということを直接説明していない。それに対して、（唐）李瀚著『蒙求』（天和二〈一六八二〉年刊）[21]においては「西施捧心」の項目に、「西施ハ越女ナリ、所謂西子ナリ也。」という解説文が見出せる。芭蕉はこのような漢籍の啓蒙書によって、間接的に蘇軾の表現した「西子」のことを理解したとも考えられるが、傍線部③における「増注」のところで「西子ハ即チ西施ッ」という

注釈が施されているので、むしろ芭蕉はこの記述を参照したのであろう。そうであれば、芭蕉は『聯珠詩格』を通して、蘇軾の漢詩のみならず、その注釈まで目を通した可能性が大いにある。[22] ここで、芭蕉が『聯珠詩格』の注釈を目にした可能性を重視し、改めてその注釈を念頭に置きつつ、蘇軾の描いた西施像を分析したいと考える。

まず、「単注」は、晴景を描く第一句目「水光瀲灩晴偏好」に対して、「此是濃抹也」（傍線部①）と解釈した。そして、雨景を描く第二句目「山色朦朧雨亦奇也」（山色朦朧として雨も亦奇也）に対して、「此是淡粧也」（傍線部②）と解説した。すなわち、「単注」は雨の降っている西湖が、淡い化粧をした西施のようだと把握している。

一方で、蘇軾の描いた西施像を踏まえた芭蕉は、発句においてどのように西施の容貌を描出しているのであろうか。これに関する先行研究を検討すると、芭蕉は雨景の象潟を、西施の濃い化粧か薄い化粧か、どちらを喩えたのか、定説になっていない。たとえば、『おくのほそ道評釈』において「芭蕉が象潟の雨景に西湖の「雨奇」を思い、西施の「濃抹」を連想したのである」と解説した。それに対して、たとえば伊藤一郎氏は「『おくのほそ道』所ごころ―「象潟」の巻[23]」において、雨に濡れる西湖を薄化粧の西施であると解釈し、芭蕉がそれを踏まえたという。芭蕉が参考にした『聯珠詩格』の解釈を重視するならば、芭蕉の描いた雨景の象潟によって連想した西施の容貌は、雨による淡い化粧をしたものであると言えよう。

次に、蘇軾の描いた西施像と、楊貴妃との連想関係を一考してみることとする。蘇軾のように西施の化粧の濃淡を通して、西湖の景色を描写することは、中国文学においても前例のない斬新な表現である。蘇軾が描出しようとした西施像は「淡粧濃抹兩相宜」というように、化粧が淡くても濃くても、その美しさが変わらない女性である。「淡粧濃抹兩相宜」に関して、「増注」は傍線部④で示したとおり、「虢國夫人美質不施粧粉。」という解説文を付け加えている。「虢國夫人」は楊貴妃の姉妹のことであり、『古文真宝前集[24]』で杜甫の漢詩「麗人行」や蘇軾の漢詩「続麗人行」にも描かれている。よって、「増注」の解釈を考慮に入れてみると、蘇軾の描いた西施の美しい特質が楊貴妃の姉妹と類似していると汲み取れ、この二人は確かに連想関係を持っていると考え得る。かつて『古文真宝』を愛読した芭蕉は、無論「麗人行」という漢詩を通して「虢國夫人」のことを承知していたのであろう。それに加えて、さらに「増注」の影響を受けたとすると、芭蕉が楊貴妃によって眠る西施を連想した可能性はないとはいえない。

しかし、『聯珠詩格』と『古文真宝』を検討する限りでは、西施から楊貴妃を連想することは可能であるが、その両書において西施を眠る美人であると断言する表現は見当たらない。したがって、眠る西施という西施像は、芭蕉の独自の連想なのか。それとも芭蕉が合歓の花をかけて表現しようとしたのは、実は

憂愁のため目を伏せる西施なのか、依然として明言しがたい。この疑問を解明するためには、芭蕉の閲覧した他の漢籍を検討・調査することが、欠かせない作業であろう。

四、眠る西施像の出典について

これまで述べてきたように、眠る西施像については、従来の史書や詩集、歌集において、見出せない様相であった。ところが、江戸初期に刊行された漢籍を調査した結果、明代に成立した漢詩の類書である『円機活法』[25]巻二十の「百花門」という部立の、「海棠花」という親項目において、眠る西施像を見出すことができた。[26]「海棠花」の親項目の後に、「叙事」「事実」「品題」などという子項目が並んでいる。「海棠花」というと、従来は楊貴妃に擬えられる花として知られている。そのことについては、子項目「事実」（詩例や事例など）において「睡未レ足」という見出しで、楊貴妃の容貌が記されている。

子項目「事実」の次にある「品題」（題材を示す）では、海棠花に関する表現がどのように活かされていることかについて、用例を挙げて述べている。そこでは、海棠花の表現に関する漢詩が一聯ごとに並べられている。そして、眠る西施が「絶（ハナハタ）怜レ西子カ偏ニ貪ルコトヲ睡ヲ。却テ恨ム東君ノ不ルコトヲ与ヘレ香ヲ。（絶（はなはだ）怜れむ、西子が偏に睡を貪ることを。却て恨む、東君の香を与へざることを）」という一聯によって書き表されている。この一聯を訳していくと、西施が単に眠りを貪る（寝坊する）ことを、私（詩作者）は非常に可憐に感じる。東君（日の神）[27]が香りを恵与してくれないことを、私がかえって不満で悲しく思う、ということである。ここで示した西施像は、昼に眠りを貪る女性というものである。この西施像は、合歓の花が昼に居眠りする女性のようである、という許六の「百花譜」のイメージと重なる。

周知の通り、『円機活法』は江戸初期において流布し、芭蕉も目にしていた。[28]特に仁枝忠氏は「円機活法について―特に編者と俳文学への影響」[29]において、芭蕉の発句「瓜作る君があれなと夕すゞみ」に表現されている「瓜作る」とは、『漢書』「蕭何伝」を踏まえたものと考えられるが、芭蕉は『漢書』を読んでいなかったと思われるため、『円機活法』巻二十一「百果門」によって、読み取ったのであろうと指摘しており、以後の先行研究はその見解に賛同している。かつまた、同じくこの「象潟」章段において、「江山」と「簾を捲ば」という表現は、『円機活法』を踏まえたのではないかと、尾形仂氏は『おくのほそ道評釈』において指摘している。[30]すなわち、芭蕉は『円機活法』を引用したことがあるのみならず、さらに「象潟」章段を著す際、同書を用いていた。したがって、発句における眠る西施像についても、『円機活法』を参照した可能性が十分にあるといえる。「象潟や」の発句においても『円機活法』を参照したという可能性を念頭に置いてさらに考えてみると、芭蕉が合歓の花を西施と取り合わせることによって表現した眠る西施像は、無から生じたものではないといえる。むしろ『円機活法』を典拠と

して、描き出された西施像であろうと推量される。以上のような仮説が正しいとすれば、従来の先行研究が指摘した眠る西施と楊貴妃との連想関係は、どのように再考できようか。

そこで『円機活法』の分類の仕方によって、海棠花、寝不足の楊貴妃、寝坊する西施という三者について、次のように整理してみることとする。

①親項目の「海棠花」にある楊貴妃の例と、西施の例とが、それぞれ「事実」と「品題」という子項目に分かれて載っている。すなわち、「海棠花」は楊貴妃と西施という二人の美人を表現し得る。

②子項目「事実」に、寝不足の楊貴妃という故事が取り上げられ、「唐の楊妃が伝」という出典に拠ることが提示されている。

③子項目「品題」に、寝坊の西施という表現が記されているが、出典が提示されていない。

つまり、『円機活法』の分類からすれば、眠る西施とは寝不足の楊貴妃から発生したものではなく、「海棠」の子項目として、楊貴妃とともに立項されている。

よって、先行研究が指摘した西施と楊貴妃との連想関係を否定することはできないが、海棠花と直結して表現された眠る西施像そのものを重視すべきであると察知する。換言すると、楊貴妃との連想関係に注目しなくても、『円機活法』「海棠花」を通して眠る西施像が見出せる。そこで、『円機活法』に眠る西施像が見出せたのみならず、本論の第二節においても検討したように、元来合歓の花は眠る意を掛ける表現でもあった。そのため、芭蕉の「象潟や」の発句における眠る西施の容貌を、看過してはならないのではないかと考える。

結、芭蕉の描いた西施像

これまで考察してきたように、「象潟や雨に西施がねぶの花」という発句における西施像は定説がなく、特に近世期に見られた眠る西施像が近現代になって消失してしまっている。その原因として、その西施の眠る容貌に関する出典が明確にされていないからであろうと予想される。しかし、近世初期に当たって、合歓の花は和歌や俳諧において、言うまでもなく、眠る花であるという見立てによって表現されている。そして、蕉門の許六は芭蕉の俳諧を継承しつつ、やはり合歓の花を眠る花と認識していることから、芭蕉が合歓の花を眠る花として捉えた蓋然性を否定できない。

一方で、芭蕉は「象潟」章段を記す際、特に『聯珠詩格』に収められた蘇軾の「西湖」詩を踏まえて、この発句を詠んだと従来から指摘されてきている。その上、江戸初期に流行した『聯珠詩格』は注釈を含んだものである。『聯珠詩格』の注釈では、蘇軾の描いた雨景の西湖は淡い化粧をした西施のようだと解釈している。ただし、この注釈には、眠る西施について一行も触れていない。そのため、芭蕉が『聯珠詩格』の注釈を通して、

雨の景色が淡い化粧をした西施のようであると捉えた可能性があるが、眠る西施を連想したとは確言できない。

注目すべきことに、芭蕉に影響を与えた『円機活法』の「海棠花」という詩材に関する記述の中に、「眠りを貪る西施」という表現が確認できる。「象潟」章段において、『円機活法』の素材を用いた表現がほかに見出せるため、発句における眠る西施像についても、『円機活法』を参照した蓋然性が高いと考えられる。ゆえに、眠る西施像という近世期の解釈を再評価する必要がある。

以上、芭蕉は象潟の地勢を悩ましい西施のようであると表現したが、それだけではないと思われる。さらに古注が提示したように、発句を通して眠る西施像も重層的に描出していると指摘した。その上、淡い化粧をした西施は『聯珠詩格』の詩注を通して把握した。そこで、本稿では発句「象潟や」における、「雨」と「ねぶの花」によって生じた西施像は、「淡粧で昼に眠っている」西施の姿として解釈したい。なおかつ、具体的に『円機活法』を示したことによって、この発句における眠る西施という様相が明らかになった。

注

（1）素龍筆芭蕉所持本『おくのほそ道』元禄七（一六九四）年成（鈴木知太郎氏・伊坂裕司氏『校注おくのほそ道』笠間書院、一九七二年）に拠った。なお、資料の引用に際して、現在通行の字体を用い、適宜句読点を補った。そして、丁移り、改行は示さず、読み下し文、清濁、記号、括弧、傍線は黄による。また、漢詩における合字は開いて示した。以下同。

（2）本稿において引用した古注書の成立年及び出拠は次の通りである。

- 『芭蕉翁句解　過去種』安永五（一七七六）年跋、本文は東京大学附属図書館洒竹文庫蔵本（マイクロフィルム）に拠った。
- 『芭蕉翁発句集蒙引』、春夏秋冬の巻四冊の中、春の部だけ享和元（一八〇一）年に刊行。外の三冊は稿本のまま残っている。本文は東京大学附属図書館竹冷文庫蔵本（マイクロフィルム）に拠った。
- 『俳諧一串抄』、天保元（一八三〇）年序、本文は早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」に拠った。

（3）本文で引用した『句解和談奥の細道』は宝暦八（一七五八）年刊で、『奥のほそ道解』は天明七（一七八七）年成である。上記の古注書は西村真砂子氏編『奥の細道古註集成』（笠間書院、二〇〇一年）に拠った。

（4）例えば、次のようにある。

- 故ニ祖翁モ亦象潟眺望ノ吟ニ西施ガ睡レル容ヲ云ントテ先ツ僅其ノ意ヲ起ス。是レ漢文ニモ貴フ所ニテ、文書ニモ此法アリ。亦吾カ翁ノ文ニ奇中ノ妙ナルモノナリ。（蓑笠菴梨一『奥細道菅菰抄』安永七（一七七八）年刊、本文は天理大学附属図書館綿屋文庫蔵本（マイクロフィルム）に拠った）
- （前略）この詩をふまへて、雨の蚶潟を西施がねぶるにたとへたり。坡公の意匠、蕉翁の俳腸にあらずばこゝに及ぶ事あたはざるべし。（法橋吾山『朱紫』天明四（一七八四）年刊、本文は東京大学総合図書館竹冷文庫蔵本（マイクロフィルム）に拠った）
- ここに於て、感し是にそふるに風色悲しミを加へて、西施か眠れる容を思へるにや。（其日庵錦江『泊船集解説』安政七（一

八六〇）年跋、本文は東京大学総合図書館洒竹文庫蔵本（マイクロフィルム）に拠った

(5) （明）凌稚隆編校・李光縉増補『史記評林』延宝二（一六七四）年刊（和刻本）。本文は大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。

(6) （宋）林希逸注『荘子鬳齋口義』寛文五（一六六五）年刊（和刻本）。本文は大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。

(7) 具体的に内容を検討すると、『史記』において、「越王」はどのように西施という美人を利用して勝ったのかを述べたが、西施の容貌、あるいは西施の経歴や境遇に関する描写はないのである。そして『荘子』において「西施捧心」という故事を載せ、西施が心の病によって顔をしかめる容貌を描いたが、それは『史記』で描写された政治の犠牲者による「憂愁」を持つ印象とはまた異なるのである。ただし、何れも「眠る西施」の容貌ではないとはいえる。

(8) 東京大学総合図書館竹冷文庫蔵本（マイクロフィルム）に拠った。

(9) 前掲注（8）竹冷文庫蔵本に拠った。

(10) （宋）黄堅編『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』元禄九（一六九六）年刊（和刻本）。本文は大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。

(11) 小島憲一氏・木下正俊氏・東野治之氏『新編日本古典文学全集・万葉集②』（小学館、一九九五年）。

(12) 山田忠雄氏『元和三年版 下学集』（新生社、一九六八年）。

(13) 架蔵本に拠った。

(14) 許六は「旅懐狂賦」（元禄六（一六九三）年作）において、「旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見残したるは、尤俳諧の情也。我翁、白川の田植歌をきゝて、奥羽象潟を廻り、高舘の夏草に兵ともか夢を驚し。」と述べ、『おくのほそ道』がまだ刊行されていない時期に、すでに読んだということが判明している。本文は天理図書館綿屋文庫編『俳書叢刊』第六巻（臨川書店、一九八八年）に拠った。

(15) 西山宗因全集編集委員会『西山宗因全集第4巻』（八木書店、二〇〇六年）。

(16) 島津忠夫氏「美作道の吟行　西山宗因『津山紀行』」（『国文学解釈と鑑賞』8巻71号、二〇〇六年）。

(17) 本文は『古典俳文学大系』（1―10）（集英社、一九七〇―一九七一年）に拠った。

(18) 尾形仂氏は『おくのほそ道評釈』において、芭蕉の踏まえた蘇軾詩は『聯珠詩格』に拠ったと指摘している。なおそれ以前に素丸『説叢大全』（安永二（一七七三）年刊）及び、月院社何丸『芭蕉翁句解大成』（文政十（一八二七）年刊）においても『聯珠詩格』が典拠であると提示している。

(19) 『斯道文庫論集』第四十三輯、二〇〇八年。

(20) 和刻本。東京大学総合図書館蔵本に拠った。

(21) 徐子光補註、和刻本。早稲田大学図書館蔵本に拠った。

(22) 芭蕉が『聯珠詩格』の詩注を受容したという見解について、上野洋三氏は「詩の流行と俳諧」『芭蕉論』（筑摩書房、一九八六年）において夙に詳しく検討している。芭蕉の『常盤屋の句合』（延宝八（一六八〇）年）判詞「五文字力ありて一句もつよくきこえ侍るまゝ、右勝たるべし」、あるいは『おくのほそ道』「衣更」の二字、力有てきこゆ。」、という文章における「力有りて」は、「力有りて」という語が頻出する『聯珠詩格』の詩注（たとえば、巻十七・宋謙甫「春晩」「庭前不合新添樹（不合二字下得有力）」に拠ったかと指摘している。あるいは、俳文「坡翁雲天の笠の下には江海の蓑を振（ふるう）。」（天和二（一六八二）年）は、『聯珠詩格』七「巻七」無名氏「戯東坡」単注を参照したものであると、『松尾芭蕉集①』においても指摘されている。

(23) 東海大学日本文学会・湘南文学第三十九号、二〇〇五年。

(24) 前掲注（10）『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』参照。

(25) 『円機活法』延宝元（一六七三）年刊（和刻本）。本文は大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。

(26) 同じく「百花門」において「合歓花」も立項されているが、詩文

において主に男女関係を譬える花である。眠る花として捉えた和歌や俳諧と異なっているのである。

(27) 「東君」とは、日の神のことである。たとえば『史記』封禅書「晉巫祠五帝・東君〈略〉先炊之属〈索隠〉広雅云、東君、日也」とある。(『日本国語大辞典』を参照。)

(28) たとえば、尾形仂氏『芭蕉必携』(学燈社、一九八〇年)、あるいは中村俊定氏『芭蕉事典』(春秋社、一九七八年)において、指摘されている。

(29) 『日本中国学会報』二十七号(一九七五年十月)。

(30) 尾形仂氏の指摘によると、芭蕉の用いた「江山」という表現は、『円機活法』巻十一「文学門」を参照すれば分かるように、その語に行旅・詩作の連想が含まれているという。そして、「捲レ簾ヲ」とは、『円機活法』巻十三「遊眺門」によれば、詩文に眺望を叙する場合の常套語という。

【付記】 本稿は、大阪俳文学研究会四月例会(平成二十二年四月十八日)、及び俳文学会第六十二回全国大会(平成二十二年十月十七日)の口頭発表に基づいたものです。席上で特に安保博史先生、石川清彦先生、塚越義幸先生、藤田真一先生から、ご教示を賜り、その内容を修正するに至りました。そして、学会の前後に、伊藤一郎先生、鈴木重雄氏、千賀幸三郎氏から、貴重なご指摘を頂きました。ここに記して深謝申し上げます。なお、貴重な資料の閲覧、引用を許可してくださった関係諸機関の方々に厚く御礼申しあげます。

(ファン チャフェイ・神戸大学大学院生)

◇編集後記◇

一二二号をお届けする。本号には八本の投稿があり、そのうち黄佳慧氏、早川由美氏、玉城司氏、福田安典氏の論考と、寺島徹氏の「発見と報告」の計五本を掲載した。

黄氏の論考は芭蕉「象潟や」の発句を西施像の新たなとらえ方によって解釈し直したもの、早川氏のものは川喜田家の文芸活動に関わる資料の紹介によって伊勢俳壇の様相を考察した論考である。両者とも新たな視点を提示した意欲的なものである。

玉城氏のものは本誌一一六号・一一七号で繰り広げられた深沢了子氏と田中道雄氏の蕪村「花ちりて」論争に角度を変えた方向から参加したもので、この三本によって「花ちりて」句文の解釈が深まったと確信する。福田氏のものは蕪村『新五子稿』の本文の問題を論じつつ、解釈の見直しを迫った論考である。全集刊行以後、盛んになりつつある蕪村論がここでさらに追加されることとなった。

「発見と報告」の寺島氏のものは暁台に関わる資料の紹介で、俳論の乏しい暁台における新たな面を掘り起こすものとなり得ると信ずる。

また、全国大会でのシンポジウムの意義を再確認する意味もあり、会場に来てくださった方も含め、文学館関係者からの問題提起を寄せていただいた。御礼申し上げる。

本号の刊行によって、現委員会はその任期を終える。会員の皆さんのご協力に感謝したい。

次期、編集委員会は藤田真一氏を委員長として新たに出発することとなる。新委員長に期待するところ大であるが、事務局は引き続き、青山学院大学廣木研究室に置かれる。この点、お間違いないよう、投稿は引き続き廣木研究室に送っていただきたい。（廣木）

編集委員
安保博史　佐藤勝明　塩崎俊彦　竹下義人
塚越義幸　富田志津子　中森康之
廣木一人（委員長）　深沢眞二　松井貴子
松本麻子（事務局兼任）　母利司朗
青木亮人（関西事務局）

投稿先
〒一五〇―八三六六
東京都渋谷区渋谷四―四―二五
青山学院大学文学部廣木研究室連歌俳諧研究編集委員会事務局

平成二十四年三月一五日発行
連歌俳諧研究　第百二十二号　非売品
編集兼発行者　俳文学会
代表者　藤田真一
〒564-8680　大阪府吹田市山手町三―三―三五
関西大学文学部国文学専修
藤田真一研究室内
俳文学会
http://www.haibun.org/
電話　〇六―六三六八―一一二一（大代表）
〇六―六三六八―〇三二一（国文学合同研究室）
振替　〇〇一四〇―五―一三三一六（郵政省認可第四種学術刊行物）
会費　年間五、〇〇〇円
印刷　和泉書院
〒543-0037　大阪市天王寺区上之宮町七―六
電話　〇六―六七七一―一四六七